

二〇一六年六月一二日 主日礼拝説教要旨
恵みに応え、喜び蒔く

(コリント八・七、八、一一、
九・六、七)

先週の中高科クラスでのこと。教会
用車購入のお知らせを見ていた誅学
生が「教会ってどうやって稼いでんだ
」と言。一人が言い出すともう止まら
ない。「アメリカからお金が来るんだ
ろ」という都市伝説や「牧師さん、ど
うせ税金払ってないんだろ」とかい
う猛者も。幸いにして牧師の家に生ま
れたものだから、一通り説明をした
が子どもとはいえ立派な人間。お金に
ついての興味は一人前である。

閑話休題。私たちは礼拝の中で献金
を捧げているのだが、献金の本質や動
機、さらには結果についてはつきりと
語られることは多くはない。「聖なる
教会でお金のことなんて」という思い
があるからかもしれない。しかし今朝
の箇所はこれらのごとについての明
確に教えている。以下献金について三
つのことを考えたい。

一、献金の本質は恵みのわざである

この箇所はパウロが先にコリントの教
会に対して要請したエルサレム教会への

支援献金を繰り返し行っているという個
所である。ここで注目すべきはパウロは他
の聖徒達への支援として捧げられる献金
を「恵みのわざ」と位置付けていること
である。しかしこの「恵み」はエルサレム教
会が先にコリントの教会を助けていたとい
う人間同士の助け合いに基礎を置くもの
ではない。むしろ九節にあるように、主イ
エス・キリストの恵みである。では「恵み」
とは何かと言え、一言で言えば「タダ」
である。本来私たちが支払うことの出来
ない罪の価をイエスが代わって支払って下
さったのだ。私たちは何もしていない。だ
が私たち信徒はこの業が文字通りプライ
スレスであることを知っているので、この恵
みに応答する。その表れの一つが献金なの
だ。ゆえに献金は対価ではない。神の恵み
に対する私たちの感謝の表れなのだ。

二、献金の動機は喜びと熱意である

続いて動機について考えたいのだが、こ
の箇所を読んでいくとどうもコリントの教
会は最初こそ喜び勇んでこの事業に乗り
出したようだが、徐々に低調になったよう
だ。そこでパウロは彼らに献金を勧めるの
だが、その際命令したり(八・八)、無理
強いさせたり(九・七)はしていない。な
ぜだろう。「一口〇〇ドラクマ、最低〇口
以上で宜しく。By.パウロ」とでもノルマを

課した方がずっと簡単ではないか。そうし
ないのには理由がある。それは神が心を見
る方であり、喜びと情熱のこもった心から
の捧げものを受け入れるお方であるから
である。それはあのカインとアベルの献祭
からこのかた変わらない真理である。それ
ゆえにパウロは中だるみしているコリント
教会に対して、試験の中にあるマケドニア
諸地方の教会において行われた恵みのわ
ざを証しすることによって、彼らの心を燃
え立たせようとしたのである。

三、献金の結果はあふれる祝福である

更に九章を読むと最初は熱心と喜びで
はじめたコリント教会が「出し渋り」の状
態にあったことが読み取れる。そこでパウ
ロは自分の同労者を派遣し、献金を得よ
うとした(九・四、五)のだが、その際、
彼らに献金の結果について述べている。そ
れが有名な「少しだけ蒔く者は、少しだ
け刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈
り取ります(九・六)」である。こうい
う「何だ、キリスト教の神はやけに即物
的だな」と思う向きもあるかもしれない
が、ここでの「少し」「多く」は文字通り
の多少という意味と同時に心の有り様を
教えていると思われる。つまり恵みの神に
期待せず、吝嗇な根性で神の畑に少しし
か蒔かないものは応分のものしか与えられ

ず、逆に神の恵みの畑の大収穫を期待し、
大いに蒔く者には神ご自身があふれる祝
福をもって報いて下さるということである。
ここで注意したいのは心とその表れとい
うことは基本的に順接、正比例であるとい
うことだ。こういふとある人は言うかも
しれない。「いや先生、レプタ二枚を主は
嘉せられたじゃないですか。だから額じゃ
あないですよ」と。はつきり言おう。大間
違いだ。主が彼女を称えたのは彼女の献
金が「オール・イン」だったからに他なら
ない。(参・マルコ二・四四)。彼女は
神の畑に期待して大胆に蒔き、その結果
主に嘉せられたのだ。

* * *

リック・ウオレン牧師。今やアメリカ有
数のメガ・チャーチの牧師となった彼のス
タートは開拓伝道からだった。開拓伝道
は洋の東西を問わず「ビジョンはあるが金
はない」がデフォルト。彼とてその例外で
はなかった。しかし彼はその妻は働きの最
初から「恵みの応答としての献金」に励ん
だ。それから幾星霜。今や彼は大統領就
任式の牧師となり、その著書は三千万部
を売り上げているのだが、彼は全収入の
十分の一で生活をエンジョイし、残りは捧
げているという。神の恵みに積極的に応答
し、共に神の祝福に与ろうではないか。